名詞辞書における下位区分間の意味的関係の記述

3Ｈ－5

桑畑和佳子　橋本三奈子　村田賢一

情報処理振興事業協会(IPA) 技術センター

1　はじめに

『ＩＰＡＬ名詞辞書』では、見出し語の持つ用法を統語的特徴や意味的特徴によっていくつかに分類し、これを「下位区分」と呼んでいる。例えば、見出し語「たまご」は、以下のように３つに下位区分される。

1．動物のメスが生む卵子。
　例：池の金魚が卵を産んだ。
2．特に食用とされる鶏卵。
　例：うちでは毎朝玉子を食べる。
3．修行中で役割を十分に果たせない状態にある人。
　例：彼はカメラマンの卵である。

このとき３つの下位区分間には、区分２は区分１に包摂されるものであり、区分３は、区分１のメタファーであるという意味的関係がある。

それぞれに下位区分されたものがどのような意味や用法を分類したものであるかは、下位区分ごとに記述してある統語情報、意味情報、形態情報に関する辞書記述から理解することができるが、各下位区分間同士がどのような意味的関係にあるかまでは、これまでのＩＰＡＬの辞書記述では述べていなかった。

近年、このような意味的関係について、「多義」や「類義」の問題の中で論じられている（国広[1]，山梨[2]）。山梨は、これまで主に修辞学の領域の中で研究されてきた比喩が、単語の多義性、意味変化、転義などの現象を考察する際に有効であると述べている。

我々は、具体物を表す見出し語を中心に用例を分析して、山梨が示した比喩に基づく拡張のプロセスを参考にし、下位区分間に見られる意味的関係を考察した。本論文では、そのうちの特徴的な意味的関係と、その辞書記述について述べる。

2　比喩に基づく拡張

もともと「比喩」は、運用論上の概念であり、意外性や新奇性を出すために使われ、臨時的に用いられることが多い。しかし、そのうちの用法が固定化して一般的に使われるようになったものは、見出し語のもつ一つの用法として記述される。例えば、「彼は本の虫だ」「争いの種になる」「言葉の壁がある」といったものである。これらはメタファー（隠喩）と呼ばれる比喩表現の一つであり、その統語的特徴については橋本・他[3]で論じてある。

ところで、[3]では「比喩的表現」としてメタファーのタイプしか取り上げなかったが、見出し語の用法の中には、さらに、別のタイプの比喩に基づく拡張も観察される。例えば、「鍋がおいしい季節になった」「あのピッチャーはいい肩をしている」という表現は、前者が［容器］から［中身］へ、後者が［物］から［機能］へ、それぞれ隣接関係にある別のものへの指示に意味が拡張されている。これは、メトニミー（換喩）と呼ばれるものである。また、「うちでは毎朝玉子を食べる」という時の「たまご」は、「動物のメスが産む卵子」のうち、特に「鶏卵」を指す、と冒頭で述べたが、このようにカテゴリ全体でその一部を、あるいは一部でカテゴリ全体を表現するといった包摂関係にある比喩表現は、シネクドキ（提喩）と呼ばれるものである。

ここで注意すべきことは、シネクドキの包摂関係といわゆる全体部分関係とを混同しないことである。例えば、見出し語「花」には、次の２つの下位区分の用法がある。（それ以外の用法はここでは略する。）

1．花を咲かせる植物。
　例：庭の花に水をやる。
2．植物の茎や幹に生じる生殖器官または花葉と花軸の総称。
　例：昆虫が花に隠れる。

上の区分１と区分２は、「一本の花」という［全体］と「花葉と花軸」という［部分］との全体部分関係にあるが、我々はこれをシネクドキとはいわない。先ほどの「たまご」の例と比べてみよう。「たまご」の場合は、「鶏卵」以外にも「たまご」と呼べるものが複数ある。例えば、「金魚の卵、あひるの卵、かえるの卵」などである。他方、「花」の場合は、「花葉と花軸」以外、例えば「茎」などは「花」とは呼べない。つまり、「たまご」の場合はカテゴ

Relationships between the Senses of Polysemous Nouns
†Wakako KUWAHATA, et al.,
Software Technology Center,
Information-technology Promotion Agency, Japan
3-1-38 Shiba-koen, Minato-ku, Tokyo, 105 JAPAN

リ間の包摂関係であり、「花」の場合は、物とその一部分との間に成り立つ全体部分関係であるといった違いがある。よって本論文では、前者の関係は「シネクドキ」として論じ、後者の関係は隣接関係の一つと捉え、メトニミーとして論じる。

3　見出し語にみられる比喩的拡張

見出し語の下位区分間の意味的関係を捉えるため、前章で述べた「メタファー」「メトニミー」「シネクドキ」に基づく拡張関係に着目し、見出し語の用法の間にみられる比喩的拡張関係を分析した。以下に、その具体例を示す。記号をはさんで右側から左側へ拡張していることを表す。記号は関係に応じて変えてある。

3.1　メタファーに基づく拡張の例

比喩の度合を測ることは難しいが、形状、性質、機能などの点から見て、もとの用法との類似度が高いものを第１群とし、低いものを第２群として区別する。第１群の表現には、「～の」の連体修飾句がなくても用いられやすいという統語的特徴が見られる。

＜第１群＞　「＜＝」
肩：洋服の肩＜＝父の肩
皮：みかんの皮，まんじゅうの皮＜＝背中の皮
こぶ：らくだのこぶ，幹のこぶ＜＝頭のこぶ
しわ：服のしわ＜＝顔のしわ
魂：作家の魂＜＝死んで魂が抜ける

＜第２群＞　「＜…」
卵：医者の卵＜…動物の卵
肩：山の肩，文字の肩＜…父の肩
皮：化けの皮＜…背中の皮
歯：くしの歯＜…赤ちゃんの歯
角：こんぺいとうのツノ＜…鹿の角

3.2　メトニミーに基づく拡張の例

メトニミーになる隣接関係には、いろいろなタイプのものがある。このうち、具体物の「全体部分の関係」による拡張は、特に見出し語の用法の中でも顕著に見られるためそれを第１群とし、それ以外の隣接関係による拡張を第２群として区別する。

以下の、「Ｂ＜＜Ａ」という表示は、「ＢがＡの一部分である」という意味である。

＜第１群＞　「＜＜」，「＞＞」
花：花が開いた＜＜花を１０本買う
手：手（hand）をたたく＜＜袖に手を通す
足：足（foot）が大きい＜＜足が長い
貝：貝（貝殻）でできた首飾り＜＜貝を堀りにいく
首：首（head）をとる＞＞首（neck）が細い

＜第２群＞　「＜－」
鍋：鍋を食べる［中身］＜－鍋で煮る［容器］
肩：いい肩をしている［機能］＜－肩がこる［物］
血：血がつながっている［機能］＜－血が出る［物］
リボン：リボンに結ぶ［形状］＜－リボンで結ぶ［物］
足：足を崩す［形状］＜－足が長い［物］
皮：皮のコート［加工品］＜－背中の皮［材料］
牛：牛を１００グラム買う［加工品］＜－牛を飼う［材料］

3.3　シネクドキに基づく拡張の例

シネクドキの包摂関係では、全体で一部分を指す用法が顕著に見られる。

以下の「Ｂ⊂Ａ」という表示は、「ＢはＡに包摂される」という意味である。

＜第１群＞　「⊂」，「⊃」
卵：鶏の卵⊂動物の卵
毛：頭の毛，羊の毛⊂体の毛
とり：鶏をからあげにする⊂鳥が空を飛ぶ
粉：粉（小麦粉）をこねる⊂チョークがくだけて粉になった
天気：今日は天気（晴れ）だ⊂天気が変わりやすい
着物：着物（和服）を着付ける⊂着物（衣服）を揃える
白墨：赤い白墨⊃白墨

4　おわりに

各下位区分間同士に見られる意味的関係を、メタファー、メトニミー、シネクドキの比喩に基づく拡張という観点から整理した。実際の辞書記述では、下位区分番号と記号を用いて表示する。例えば、３つに下位区分される見出し語「たまご」の場合は、区分２は区分１のシネクドキであり、区分３は区分１のメタファーであったので、「２⊂１。３＜…１。」と表示する。このような辞書記述は、まだ一般の国語辞典には無い、新しい試みである。さらに意味的関係を分析し、体系的な辞書記述を行うことで、自然言語処理における多義性の解消に役立てたいと考えている。

謝辞

本研究に有益な助言を頂いた臨時WG委員の緒方典裕氏、鈴木高志氏、本多啓氏、並びに共同研究者であるWG委員、臨時WG委員の方々に感謝いたします。

参考文献

[1] 国広哲弥.『意味論の方法』. 大修館書店, 1982.

[2] 山梨正明.『認知文法論』. ひつじ書房, 1995.

[3] 橋本三奈子, 桑畑和佳子, 青山文啓, 村田賢一.「名詞の比喩的表現とその統語的特徴」.『情報処理学会第49回全国大会論文集』, pp. 3–139, 1994.